

F/T09

フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

『4.48 サイコシス』
作：サラ・ケイン【イギリス】
演出：飴屋法水

11月16日(月)～23日(月・祝)

於：あうるすぽっと



F/T09 春『転校生』で衝撃を与えた飴屋法水が、
秋はサラ・ケインの遺作に挑む。
言葉、身体、震える空気。
その果てに在るもの。

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 <http://festival-tokyo.jp/>
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
制作担当：米山淳一 j-yoneyama@anj.or.jp

／ 作品について

F/T09 春『転校生』で衝撃を与えた飴屋法水が、秋はサラケインの遺作に挑む

F/T09 春、『転校生』で多くの観客に感動の衝撃を与えた演出家・飴屋法水。この秋、彼が挑むのはサラ・ケイン作『4.48 サイコシス』。デビュー作『爆破されて (Blasted)』以来、生々しい暴力や性の描写で、とかくスキャンダラスに扱われることの多かったイギリスの劇作家、サラ・ケインの遺作となった本作で描かれるのは、病める精神の内的世界。もはや明確な物語もト書きもなければ、配役の指示さえ消失し、モノローグやダイアローグと覚しきもの、数字や単語の羅列といった様々な断片から成るテキストは、戯曲としてはきわめて特異である。しかし、このスタイルはそれによって描かれる対象と完全に一致している。自己と他者との明確な境界が消え去り、しきりに死の方向へと自ら歩を進める精神。

今回ケインのテキストに対峙する飴屋法水は、これまで演劇、美術、音響、動物店経営など、多様なフィールドを越境しながら、一貫して「生命」を凝視し続けてきた。その間、彼は様々なメディアを用いて、日々の生活の中で埋もれつつある、今この瞬間にある生・存在の神秘、その不思議さや不気味さ、不確かさを可視化させてきた。そんな飴屋が、自死を選びながらも、最後に他者への開きをテキストに結晶化させたケインに接続する。彼女が書き残した、自らの内へ内へと向かう狂気と、そこにある生と死は、飴屋というフィルターを通すことによって、一作家や一精神病患者の個人的な出来事を越えた、私たちの共有のモノとして、今回リアルに立ち現われてくるだろう。それも我々には思いもつかない仕方だ。

／ 戯曲について

『4.48 サイコシス』はサラ・ケインの最後の作品。彼女はこの作品の脱稿直後、上演を待たずに、99年2月20日にうつ病で自殺。初演は00年6月、ロイヤル・コート・シアター(ジェームズ・マクドナルドの演出)。

「4.48」とは4時48分を意味し、当時うつ病に苦しんでいた彼女は、毎朝この時間に起床し、治療薬の影響の抜けた明晰な意識の下で、この作品を執筆していたと言われている。執筆時のインタビューで彼女が、「この作品では、現実と夢想との区別が失われた世界、自己と他者とを区別できなくなってしまった精神病患者の世界を描く」と語っているように、全編を通じテキストに、明確なストーリーのようなものは存在しない。精神病患者のモノローグや、患者と医師のものと思われるダイアログ、単語の羅列や数列、カルテの一部らしきものなど、合わせて24の断片で全体は成り、統合失調症患者の内的心象風景ともいえる世界を構成している。そこには、うつ病に苦しみ、治療を受けていた彼女自身の経験や病院で見聞きしたものが確かに反映されているであろうが、この作品は単なる自伝的なものにはとどまらない。むしろ、これまで1作ごとに、内戦、家庭内紛争、カップル間、個人間の紛争と次第に焦点を絞ってきた彼女が、更に一歩進み、意識内における紛争・不和を扱った作品として、彼女の創作活動の一連の中で位置づけることができる。

ストーリーを持たない数多くの断片から成ることに加え、テキスト上では、上演に必要な役者の人数や性別も、テキストの中のどの部分が舞台上で実際に発話されるべき台詞で、それがどの俳優によってなされるべきかも全く指示されていない。舞台化に当たっては、多様な可能性が、演出家を始め、出演者や舞台スタッフに開かれている。

日本でのこれまでの上演には、川村毅演出による03年の第三エロチカ公演、03年から04年にかけての久保亜紀子による演出(サラ・ケイン作品上演プロジェクト「サラ・ケイン何かが始まる」)、阿部初美演出による02年のリーディング公演を経ての06年舞台公演などがある。最近の上演となる06年の阿部初美演出では、ケインがテーマとする資本主義社会の都市の問題が、日本の現在の状況にも通じるという見地から、劇作家本人の伝記的要素を含む本作を、単なるイギリス人作家による遠い国の話という個人の枠には回収されない、社会的な広がりを持たせた舞台として上演する可能性が探られた。

プロフィール

作

サラ・ケイン Sarah Kane

劇作家・演出家

1971年イギリス・エセックス生まれ。ジャーナリストで敬虔なプロテスタントだった両親の影響で、熱心なキリスト教徒として少女時代を過ごす。後に信仰を拒絶するようになる。92年にブリストル大学演劇科を卒業。バーミンガム大学で修士号を取得。バーミンガム大学在学中の95年1月、ロイヤル・コート・シアターで上演された『爆破されて (Blasted)』で、劇作家としてデビュー。高級ホテルの一室を舞台にしたこの作品は、そこに宿泊する一組の男女と、外界で突如で起こった紛争と同時に室内に侵入してくる兵士の3人の関係性を通して、極限状態下の人間の有り様や、愛の姿を描いている。作品は後にノーベル賞を受賞する作家ハロルド・ピントーらに賞賛される一方、作品に含まれる男性同士の強姦、人肉食等の過激な暴力描写や性表現は、演劇界のみならずイギリス社会に大きな衝撃を与え、タブロイド紙でスキャンダラスに取り上げられる。ケインは、その後4年間に、4つの戯曲と1本の映画脚本を執筆し、99年にうつ病で自殺した。

デビュー作『爆破されて』だけでなく、その後の『フェイドラの恋』(96年)、『浄化されて』(98年)でも激しい暴力描写は、いわば彼女の作品の特徴として見受けられるが、その次にくる『渴望』(98年)では、それらは影をひそめる。A、B、C、Mという抽象的な記号で登場人物が表され、明確なストーリーはもはや存在しない『渴望』のテキストは、詩的な美しい台詞に満たされており、彼女の遺作となった『4.48 サイコシス』では、この作劇法が更に先へと突き進められている。『渴望』を境に、作風には大きな転換が見受けられるものの、彼女の作品は一貫して、何らかの極限状態に身を置き、全ての虚飾を取り去られた、むきだしの人間の姿を描いている。

作家の死と前後して、作品はフランスやドイツをはじめとする世界各地の重要な演出家によって上演されるようになった。デビュー当時は、過激な暴力や性行為の描写がスキャンダラスに取り上げられ、また自殺後には、作家の人物像との関連で捉えられることが多かった彼女の作品だが、没後10年を経た今日では、もう一度彼女の残したテキストそのものから、冷静に作品を理解し、彼女の業績を再評価しようという傾向が高まっている。

作品一覧

戯曲

『爆破されて (Blasted)』	95年初演
『フェイドラの恋 (Phaedra's Love)』	96年初演
『浄化されて (Cleansed)』	98年初演
『渴望 (Crave)』	98年初演
『4時48分 精神病 (4.48 Psychosis)』	00年初演

短編映画脚本

『スキン (Skin)』	95年
--------------	-----

演出

飴屋法水 Norimizu Ameya

演出家・美術家



©久家靖秀

1961 年生まれ。78 年、アングラ演劇の中心的存在だった唐十郎主宰の「状況劇場」に参加し、音響を担当。84 年「東京グランギニョル」を結成し、カルト的な人気を博す。87 年「M.M.M」を立ち上げ、メカニク的な装置と肉体の融合による『スキン/SKIN』シリーズでサイバーパンク的な舞台表現を固める。

90 年代は舞台から美術活動に移行しながらも、人間の身体に一貫してこだわり続け、輸血、人工授精、感染症、品質改良、化学食品、性差別などをテーマとして扱い、「TECHNOCRAT」という名のコラボレーション・ユニットの一員として作品を制作。95 年、ヴェネツィア・ビエンナーレに「パブリック ザーメン」で参加するが、その後美術活動を停止。同年、東京・東中野に「動物堂」を開店し、様々な生物の飼育と販売を開始した。97 年に出版された『キミは動物(ケダモノ)と暮らせるか?』(後の文庫化では『キミは珍獣(ケダモノ)と暮らせるか?』とタイトル変更)は、様々な珍獣の特徴や飼育に関する情報を提供しながらも、それだけにはとどまらず、飴屋が数々の動物と生活を共にする中で見てきた人間や動物についての数々の考察を含んでいる。

2005 年には、それまで休止していた美術活動を、「バングント」展で再開。「消失」をテーマとしたこの展覧会のメインとなる作品は、飴屋自身が閉じ込められた 1.8 メートル四方の白い箱。最小限の通気のみが許された箱の中の闇にこもる飴屋と、外部の人間のコミュニケーション手段はノックのみ。24 日にわたる会期を、飴屋は必要最低限の水や流動食を携え、箱の中で過ごし、他者には見えなくなった自らの存在を作品の本質的構成要素とした。

2007 年、静岡県舞台芸術センター主催「SPAC 秋のシーズン 2007」では、演出家として演劇活動を再開。オーディションで選ばれた静岡県内の現役女子高校生 18 人を起用した『転校生』(平田オリザ作)で好評を博した。同作は 09 年 3 月、静岡、ならびにフェスティバル/トーキョー09 春にて再演。

今年 7 月から 8 月にかけては、東京・原宿のリトルモア地下にて、多田淳之介作『3 人いる!』を構成・演出する。「12 日間、毎日、何かが変わっている。」という奇想天外な触れこみの、12 日間 24 回公演にも、期待と注目が寄せられている。

出演

山川 冬樹 Fuyuki Yamakawa

ホームメイ歌手・アーティスト



©高木由利子

1973 年、ロンドン生まれ。自らの「声」と「身体」をプラットフォームに、音楽、舞台芸術、美術の境界線をまたにかけた脱領域的活動を展開。身体内部で起きている微細な活動や物理的現象を医療機器などのテクノロジーによって拡張、表出させる。電子聴診器を用いたパフォーマンスでは心音を重低音で増幅し、さらに心臓の鼓動の速度や強さを意図的に制御(時に停止させながら)、そのリズムを光の明滅として視覚化。己を音と光として空間に還元することで、観客との間の境界線を消滅させてみせる。また、骨伝導マイクを使った頭蓋骨と歯とハミングによるパーカッシブなパフォーマンスは、ソニー・ウォークマンのコマースシャルで取り上げられ話題を呼んだ。

活動の範囲は国内にとどまらず国際的に展開。07 年、ベネチア・ビエンナーレ・コンテンポラリーダンスフェスティバルから前年に引き続き二回連続で招聘。同年秋に行った米国ツアーは各地で公演がソールドアウト。大きな反響を呼んだ。

歌手としては、日本における「ホームメイ」の名手として知られ、03 年ロシア連邦トゥバ共和国で開催された「ユネスコ主催 第4回国際ホームメイフェスティバル」に参加。コンテストでは「アヴァンギャルド賞」を受賞した。その独自のスタイルは、現地の人々に「(アヴァンギャルド・ホームメイ)」と称される。同年東京で開催された「第2回日本ホームメイコンテスト」では、第1回大会(2001 年)に引き続きグランプリと観客賞をダブル受賞。04 年よりシタール奏者ヨシダダイキチが結成したバンド「Alaya Vijana」に参加している。

また、美術作家としてインスタレーション作品を制作。2006 年、BankArt で「遺された声と記憶」をテーマにした作品「the Voice-over」を発表。現在、東京藝術大学、多摩美術大学、女子美術大学非常勤講師。ホームページ <Fuyuki Yamakawa website> <http://fuyuki.org/>

／ キャスト/スタッフ

演出	飴屋法水
作	サラ・ケイン
翻訳	長島確
出演	山川冬樹 他
音響	ZAK
舞台監督	寅川英司+鴉屋 田中翼
演出部	大友圭一郎
小道具	栗山佳代子
大道具	大津英輔 柚谷昌洋
製作・主催	フェスティバルトーキョー

/ 公演情報

会場 あうるすぽっと(豊島区舞台芸術交流センター)
(東京都豊島区東池袋 4-5-2 ライズアリーナビル 2F TEL03-5391-0751)

公演スケジュール

11/16(月)	11/17(火)	11/18(水)	11/19(木)	11/20(金)
19:00	19:00	19:00	19:00	19:00
11/21(土)	11/22(日)	11/23(月・祝)		
19:00	19:00	14:00		

上演時間 未定

/ チケット情報

料金 自由席(整理番号付き)
一般 4,500 円
学生 3,000 円 / 高校生以下 1,000 円(要学生証提示)

前売開始 2009 年 9 月 5 日(土)

お取扱い F/Tチケットセンター 03-5961-5209(12:00-19:00)
前売開始日 9/5(土)のみ 10:00 より受付
F/Tオンラインチケット(要事前登録・無料)
<http://festival-tokyo.jp/> (パソコン)
<http://festival-tokyo.jp/m/> (携帯)
モバイルサイトは 9 月より開設予定
F/Tステーション(東京芸術劇場前)
10 月後半より取扱い予定
電子チケットぴあ 0570-02-9999
(Pコード予約:397-082) <http://pia.jp/t/>
イープラス <http://eplus.jp/ft09/> (パソコン・携帯)

* 回数券、セット券、ペア券など、F/T チケット情報詳細につきましては、F/T 全体チラシまたは F/T 全体リリース、HPをご参照ください。

写真/クレジット一覧

新作 飴屋演出『4.48 サイコシス』 イメージ写真 (クレジット不要)



ポートレート: 飴屋法水



©久家靖秀 Yasuhide Kuge

ポートレート: 山川冬樹



©高木由利子 Yuriko Takagi

・ご利用になる場合は、写真家のクレジットを必ず併記してください。

・原則、トリミングおよび加工は不可。